

汝^な
が
つ
け
ば

吾^あ
が
う
た
ひ

河 辺 杲

”……ひふみよいむな 汝がつけば 吾がうたひ あがつけば なが歌ひ つきて歌ひて……”

良寛が「手毬^{てまり}をよめる」として詠んだこの長歌の一節には何か私の心をうつものがあり好きである。時々ふつと想いだしたように口ずさんでいる。口ずさんだからといって良寛の心境になれるものでもなく、心境になるとか近づくとかそのような大それたことを考えるまでに良寛の游戲^{ゆげ}三昧^{さんまい}の姿^{けいし}が彷彿^{ふふ}する。「遊」とせず「游」としたのは水に浮び水とたわむれ、水とともに流れるという字画の趣きを愛した良寛が好んでこの「游」の字を書いたのだそうだ。

きつと毬^{てまり}を両手でさするようにならなから童女に手渡し、童女が毬をつけば”……ひふみよいむな……”と何人かの他の童女らと歌いつづけている姿を想い描くことができ、読経できたえた美しい張りのある律動の歌声として聞えて来る。彼の詩や書にみられるリズムがそこにあるように思う。

きょうこの頃の街角や裏庭に、なわとびの姿はあっても毬をつく姿はあまり見かけなくなっているのはどうしたことだろうか。

幼稚園の庭で先生と子どもが時折毬をつく姿を見つける。毛糸でくるんだ球体を第一の恩物として子どもと遊んだフレーベルが重なってきた。不思議なことに良寛が生れた宝暦八年（一七五八）の二四年後の一八五二年にフレーベルが生れて良寛は七三年、フレーベルは七〇年、それぞれ激動の世界に生涯を送っている。


この両者が共に子どもと遊ぶ媒体に球体を用いたことも面白い。この両者の遊戯比較論は別の機会にゆずるとしても、ほぼ同時代に東西の洋を超えて人間の根元的なものがうかがえることも事実である。

子どもと保育者の保育実践をつぶさに見なおしてみる時——いままさに両者のかかわりの中におこっている事実をじっくり見つめる時——単なる方法技術としてのかかわり方ではなくかかわりのあり方が重要であることに気がつくのである。

しかもこのかかわりのあり方を決定づけるものは、真剣に遊びにうち込む子どもには真剣にいっしょに遊びながらかわることが大切であり、すなおな子どもには保育者自身がすなおにかかわることの大事さ、つまり子どもと保育者とは真むかいになって成立している「生の事実」がそこにあることに気づくのである。この人間と人間が真剣に向かいあってそこにおこっている「生の事実」をじっくりみつめ、これを明らかにしながら日々あらたな子どもとの生活を続けていくことが保育実践でもあり、そのかかわりの中で動いている子どもともう一方の保育者自身の動きを同時に問題にし検討することが保育実践には欠かすことができないように思う。

そこには立往生といった一瞬動きの止まる状況もあろう。しかし動きは止まってもお互いの

心の中では何かがおこっている場合が多い。また子どもの帰ったあとからあと味の悪さや心残りを感ずるときもある。

「……ながつけば あがうたひ あがつけば ながうたひ つきてうたひて……」というリズムカルな呼応関係も機械のように続くわけでもなく、ある時は早くある時はおそくなったり、毬をはずすことで動きが止まってしまうこともある。お互いが心を動かし、息をはずませて交^{まじ}わっているのである。地方によっては仲間に入れてほしいとき「まぜて」と言うところもある。ところでこの「交」の甲骨文字は「」で両脚を組みあわせ交わらしている象形で「X」と同形の字だといわれる。「X」の字は「本来異質のものが、異質性を保ちながら一緒に存在すること」であり、そこには新しいものが生み出されるという意味も加わる。ある一点で同じ場をもつことによって全く新しいものが生れる。

それはまさに新しいイメージのわいてくることでもあり、またそのイメージを共有することでもあり、さらにまた次におこる新しい動きそのものを意味するように思う。「學」や「教」の中にも「X」の字が見られるのも面白い。

交わりつつ新しいイメージがわき、そのイメージを共有しつつ新しい動きが生ずるときその交わりはほんものである。

リズムカルなはずみをもった交わりをたのしんだ良寛の心がほのぼのと見えて来る。

(洗足学園大学)